

# ふるさと御所 歴史探訪

## 江戸時代の人口〈3〉

これまで、江戸時代中期以降は、人口にほとんど変化がなかったこと、御所町では、出生と死亡の関係では自然減であったこと等を述べました。ここには、現在と共通する問題があるようです。

まず、16歳から40歳までで、配偶者のある人の人数を調べました。調べたのは、宝暦2年(1752)、文化6年(1809)、天保7年(1836)、慶応3年(1867)の4年分です。宝暦2年から文化6年までは、57年間ですが、この間の宗門改帳は残っていません。他は約30年ごとで、全部の宗門改帳が残っている年にしました。

5歳ごとに区切って、有配偶者率(結婚をして配偶者のある人の割合)を求めました。その結果を表1に示します。

年	区分(歳)	16~20	21~25	26~30	31~35	36~40	
							家持
宝暦2年	1752	男性	0.0	12.0	28.6	<b>64.5</b>	80.0
	女性	0.0	6.8	38.7	<b>59.1</b>	75.6	
文化6年	1809	男性	17.3	32.9	<b>65.6</b>	80.6	80.4
	女性	10.3	35.5	<b>58.7</b>	73.8	82.4	
天保7年	1836	男性	0.0	14.9	25.0	48.4	<b>51.5</b>
	女性	1.5	2.1	24.6	44.2	<b>61.4</b>	
慶応3年	1867	男性	6.8	34.1	48.0	<b>58.1</b>	64.6
	女性	4.2	23.3	44.6	44.1	<b>70.4</b>	
宝暦2年	1752	男性	0.0	13.5	33.3	<b>54.2</b>	54.7
	女性	0.0	4.5	21.9	27.8	48.1	
文化6年	1809	男性	0.0	27.3	42.2	<b>67.5</b>	60.0
	女性	2.8	12.9	27.8	<b>56.3</b>	50.8	
天保7年	1836	男性	0.0	8.8	25.8	<b>63.3</b>	89.5
	女性	1.0	6.5	21.3	35.1	47.3	
慶応3年	1867	男性	5.1	38.5	<b>52.2</b>	66.7	81.8
	女性	3.7	11.4	29.9	37.4	<b>56.4</b>	

表1 御所町の年齢層別の有配偶者の割合 (%)

表1からわかることは、左記の通りです。

- (1) 家持と借家を比べると、家持の方が有配偶者率が高いようです。この差は時代が下がるにしたがって大きくなるとともに、有配偶者率そのものが低くなっています。
- (2) 20歳以下の男性で結婚している人はほとんどありません。21~25歳でも家持が8.8、14.9%で、借家が2.1、6.8%です。
- (3) 20歳以下の女性の場合、宝暦2年以外はすべて10%未満です。
- (4) 21~25歳の女性では、家持はすべての年で30%前後です。借家の場合、宝暦2年は30%以上ですが、年とともに減少し、慶応3年は11.4%になっています。

(5) 有配偶者の人数が独身の人数より多くなる、すなわち50%以上になる年齢区分を太字で記入しました。想像以上に年齢が高いことがわかります。

次に、前述と同じ4年分で、両親が健在の世帯について、子どもの数の平均を調べたのが表2です。この表には、家持と借家の全世帯数、両親健在の世帯およびそれらの割合を記載しています。

年	区分	全世帯数(A)	両親健在世帯数(B)	割合(B/A)(%)	子ども数(D)	子ども数平均(D/B)	子ども0人世帯を除外した平均(人)
宝暦2年	1752	329	289	87.8	478	1.65	2.16
	借家	553	364	65.8	477	1.31	1.94
文化6年	1809	882	653	74.0	955	1.46	2.94
	借家	419	212	50.6	359	1.69	2.12
天保7年	1836	722	409	56.6	745	1.82	2.31
	借家	214	139	65.0	307	2.21	2.54
慶応3年	1867	513	189	36.8	364	1.93	2.41
	借家	727	328	45.1	671	2.05	2.47
宝暦2年	1752	172	119	69.2	256	2.15	2.49
	借家	662	236	35.6	361	1.53	2.12
文化6年	1809	834	355	42.6	617	1.74	2.26
	借家	419	212	50.6	359	1.69	2.12

表2 御所町の子どもの数の平均等

除外した世帯には、独身の世帯、何かの理由で片親の世帯等が含まれますが、最も多いのは独身です。また、子どもの総数および子どものいない世帯を引いた平均も記載しました。子どもには養子もありますが、すべて実子としています。表2からわかることは、左記の通りです。

- (1) すべての年で平均の子どもの数は、借家より家持の方が多く、時代が下がるにしたがって借家が増えていきます。
- (2) 平均の子どもの数は、時代による傾向はみられませんが、子どもの総数は、時代が下がるにしたがって少なくなっています。
- (3) 子どものいない世帯を除外した子どもの数の平均でも2人強です。具体的には子どもの数と世帯数の関係は割愛しましたが、慶応3年以外は子ども1人の世帯が最も多いのです。

(4) 幕末には、借家の両親健在世帯の割合は、3分の1強です。これは独身世帯が多いためです。晩婚化、結婚しない人の増加等による人口の自然減は、現在と同じ傾向のようです。平成26年(2014)の合計特殊出生率は、1.43ですが、これに近いのではないのでしょうか。このような傾向は、江戸、大坂等の都市部での共通したものです。農村部では、多少の人口増があり、それが都市部に流れることによって、バランスが保たれていたのです。

### 追記

先月号の表1で、天保7年のデータが間違っていました。正しくは、家数727、男1245、女1284、計2529、1軒の人数3.48です。

(文責 中井陽一)